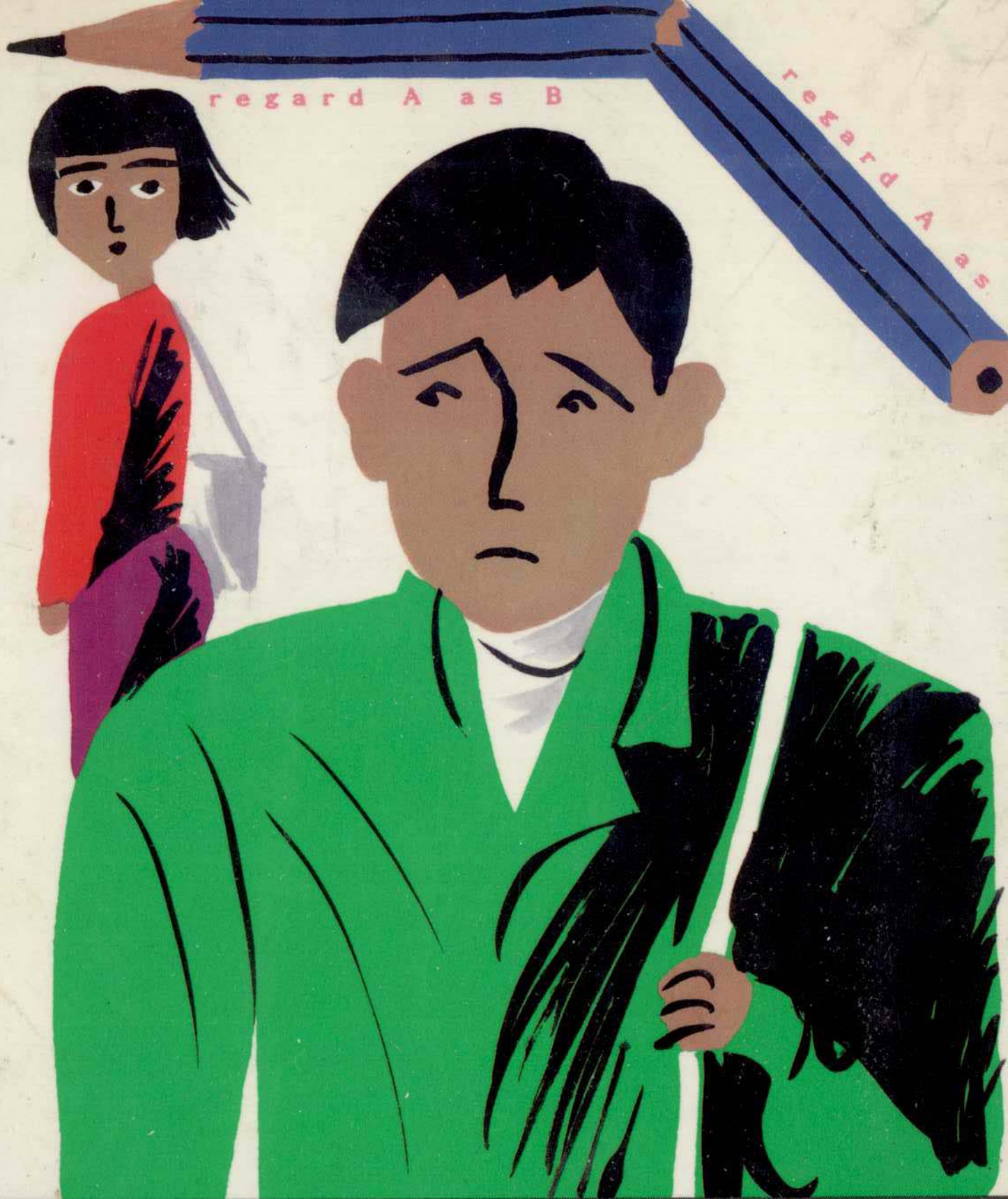




K A P P A N O V E L S

長編小説 書下ろし

学問ノススメ

よし のり
清水義範

〈奮闘編〉



お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただきましたら、ありがたく存じます。なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえていただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(〒112-111)

光文社出版局

長編小説 学問ノススメ 奮闘編

1989年8月30日 初版1刷発行

著者	清	みず	よし	のり
発行者	大	坪	昌	夫
印刷者	萩	原	歳	子
	東京都文京区後楽2-21-12 萩原印刷			

発行所	東京都文京区音羽2	株式会社	光文社
	振替 東京 6-115347	電話	東京 (942) 2 2 4 1 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(明泉堂製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Yoshinori Shimizu 1989

ISBN 4-334-02831-4

Printed in Japan

がく もん
学問ノススメ

ふんとつへん
奮闘編

し みず よし のり
清水義範



カッパ・ノベルス

目次

第一章 集中講義

5

第二章 入試改革

47

第三章 志望校

83

第四章 十二月 (1)

123

第五章 十二月 (2)

159

第六章 マークシート

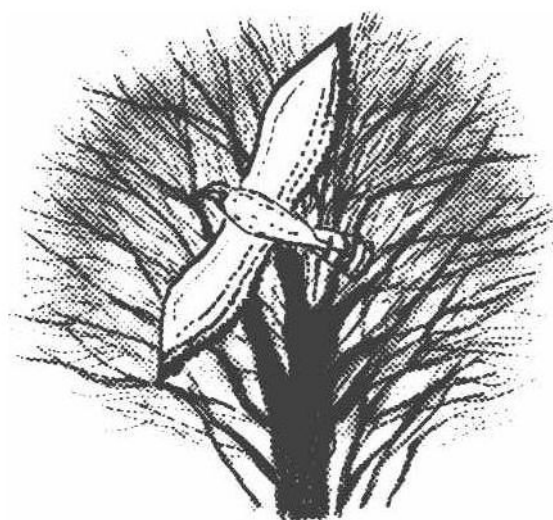
199

第七章 受験番号

235

あとがき

271



本文イラストレーション／文月信

第一章 集中講義



このくらいの問題なら、ある程度はできるな、と津吹淳一は少しホッとした。全部はできないが、かなりわかる。

A. オリエント世界を最初に統一したのは、① であった。だがこの統一は長く続かず、リディア、メディア、② などが並立する時代となった。この世界を再度統一したのはイラン人の国ペルシアであった。かれらは③ 朝のもとで強大になり、エーゲ海北岸から遠く④ にまで達する大帝国を築いた。

この空欄を語句でうめよというのだ。

まず①は、アッシリアだ。本当は、オリエント世界を最初に統一した、と言われるとよくわからなくて、何の話してんだよ、アレキサンダー大王のこと言ってるのかよ、とも思うのだが、そのあとに、リディア、メディア等に分かれたと書いてあるので、ああ、アッシリアのこと言ってるのか、とわかるのである。

でもって、②は新バビロニア王国だ。そして、それらを再統一したのはペルシア帝国だ。うん。

知ってる。ギリシアとの間で、ペルシア戦争をやったあのペルシアである。ダリウス一世、その息子のクセルクセスのペルシアである。

しかし、あれは何朝ペルシアだったっけ。ササン朝ペルシアはもともとずっと後だもんな。プトレマイオス朝は、エジプトだし。クシャナ朝、グプタ朝はインド。えーと、あのペルシアは何朝だったっけ。

淳一は③を空欄のままにした。実はこの答えは、アケメネス朝である。

④は簡単。こういうのは大概、インダス川と書いておきや間違いないのである。問題はまだまだ続く。

ペルシア戦争の後、ギリシアのポリスが結束した同盟は、デロス同盟である。それからアテネの全盛期を作りあげ、執政したのは、ペリクレス。そのあとの戦争は、ペロポネソス戦争。その戦争に従軍したといわれる哲学者はソクラテス。

よし、この辺の古代史はかなり頭に入ったな、と淳一は心強く思った。

津吹淳一。花の一浪予備校生。

いや、花の浪人なんてものはない。

昔にくらべると今の浪人は明るくなった、ということ言うむきもあるのだが、その明るさは今の若い人が垢抜けしている、ということをしているのであって、本質的にはやっぱり今も

昔も浪人はつらいのだ。

我らが主人公、津吹淳一は、半ば覚悟の上で浪人生活に入っただけであり、自分が社会から理不尽なしうちを受けているように感じていなかった。一浪ぐらいは今や当然なのだからして、深刻にならずに軽くクリアしてみようよ、と思っている。彼の両親もその辺のことは比較的冷静であり、息子に対して頑張ってくれよ、とは思っているが、そう細かく口出しするほうではない。世の中には、子供の受験のことでプツンきてしまつて、半狂乱に騒ぎたてる、なんて親もないことはないのだから、まあ、家庭面では恵まれていると言つてもよかつた。

というわけだから、淳一はそう大きな抵抗もなく、共立ゼミという予備校へ通い、ベテランの講師の授業を受け、一応のことはやっている。予備校で、友だちもできた。

しかし、それでもやっぱり、心も軽く身も軽く浪人をやっているわけでは決してない。毎日が、どうしてもずーん、と重いのである。わけもなく、くそっ、いらつくなあ、という気分になつたりするのである。それはまあ、当然のことなのである。

十月に入っていた。

ようやく残暑も終わり、秋めいた風が吹いて、人々をふと、感傷的な気分させたりする季節である。秋はなぜか、心がみなしごハッチになる。風の音に、なみだロートしたりする。

だが、浪人はこの時期、そんなロマンチックなこと言つてられない。

「九、十月は応用力伸長期」

なのである。共立ゼミの手引きにそういうことがちゃんと書いてある。その文章を写せば、こうだ。

「第二学期は、一学期、夏期で蓄えた基礎力を土台にして、応用力・実戦力を養成していく時期である。受験生の心が激しく揺れ動くのも、この時期だ。しかし、成績が伸び悩んでいるからといって、ここで軽率に志望校を下げてはいけない。学力はこの時期（九月以降）から徐々に伸びてくるのである」

ほんとだよ、という気も少しするが、この時期から学力が伸びてくる、というのは信じたい。十月になれば、もう今年もほんのちよっとで終わりだなあ、という気がしてくるのである。気の早いテレビ局はもう、今年の歌謡音楽賞をやりだし、正月特別番組の録画が始まっているなんていう話も伝わってくる。雑誌は年末号が出て、クリスマスには浦安のロマンチック・デート、なんていう広告が目につく。バ、馬鹿野郎、何がデートだ。その言葉、もう一度言った者ははりつけ磔に処す、という気になる。この夏悲しく失恋した淳一は、まだ心に傷を負っているのだ。

失恋はともかく、要するに十月ともなると今年もあとわずか、という気がしてくる。そして年が明ければ、もう、問題の時はすぐ目の前に迫っている。

そう思うと、じわっ、と冷や汗が出て、心臓の表面をなめくじが這っているような気分になるのだ。

焦る。

やな気分である。だからこそ、この時期から学力が伸びてくる、というのを信じたい。

ところが、どうも予備校の言うことも、まんま信じるわけにもいかない気がする。というのは、九、十月期のことはおいといて、そのあとの時期についても、いいことばかり書いてあるのだ。

「十一、十二月は実戦力充実期」

「一、二月は総仕上げ期」

そんなうまいこといくだろうか。

全員がそのようにうまく浪人生活を送るものなら、翌年全員が目的を果たして、よかったよかった、万万歳ではないか。そんな幸せな話は、やっぱり現実にはないわけだ。

結局、浪人のつらいところは、自分の立っている位置も、前方も、ぼやーっと靄^{もや}がかかっていてはつきり見えないという点なのである。それでいて、場合によっては崖があつてそこから落ちるぞ、と言われていたのだ。

不安である。その不安を心から払いのけるには、つまりまあ、やらなきゃならないわけである。ちくしょう。そんなことはわかってるよ。それは認めるから、この状態から既に抜け出している人間は横からごちゃごちゃ言わないでくれ。虫歯は抜くのが一番いいって、総入れ歯の人間に言われるのと一緒にゃねえか。そういう意見は聞きたかない。

というわけで津吹淳一は、自分の机に向かって世界史問題集に立ち向かっているわけであった。

カリカリと、鉛筆が紙の上に文字を書きつけていく音がしている。その音を消しているのは、F
M放送から流れる音楽だった。

十二時をまわっている。しかしまだ、眠るわけにはいかない。隣りの部屋で、現役受験生の弟
の克也^{かつや}が、ぶつぶつ英単語を口にして、やっている気配がするのだ。

あいつは気が小さい男だし、翌日、学校で眠ったりもできるから三時までやる。こっちは昼間
も充実してるから、そうはやれない。しかしまあ、一時半ぐらいまではやらなきゃいけないだろ
う。

ペルシア帝国を敗ったのは、マケドニアのアレクサンダー大王だ。えーと、BC三三一年の、
ガウガメラの戦い。これは覚えやすいな。ガメラの戦いに似てるから。ガメラと大魔神が戦った、
と覚えておこう。んで、ガウガメラの戦い。そういうわけで、BC三三〇年が、ペルシア滅亡。

ここからが、ヘレニズム時代。そして、ヘレニズム時代の二大哲学は、禁欲を重んじるストア
派と、快楽を重んじるエピクロス派。おれとしてはやっぱり、快楽のエピクロス派がいいな。快
楽を重んじるんだもん。それいいよ。うわっ、どういう快楽なんだろう。快楽っていうんだから、
その、実にいろいろとイヤらしく……。やめよう。勉強になんねえ。とにかくそれが、エピクロ
ス派。エピクロス、くそっ、覚えにくい言葉だな。エビ喰う時のテーブル・クロスでいくか。そ
うすると、エビクロスと覚えちゃいそうだな。それはまずいな。

その時、淳一の部屋がノックされた。

「う」

と答えると戸が開いて、母の恵子^{けいこ}が顔を出した。

「夜食作ったよ」

「やった。腹へってたんだ」

「焼きうどんよ」

いきなり隣の部屋の克也が二つの部屋の仕切りの襖をあけた。

「わーお、焼きうどん」

喰い物に対してすばやい反応するなあと、感心してしまう。

「二人とも、この頃わりに頑張るじゃない。お母さんも、何かしてあげなくちゃっていう気になるわよ」

「かっかっか。おれだってやる時はやるんだよ」

淳一はおどけてそう言った。苦しいながらもまだこの時期は、いくらか余裕をもってやっているわけである。

JRの北千住きたせんじゅの駅から歩いて七、八分のところに、淳一の通っている共立ゼミナール北千住分校がある。鉄筋四階建てで、すぐ裏にもうひとつ、これも四階建ての第二校舎がある。もちろん校庭なんてものではない。

システム化された予備校の中には、生徒に磁気カードを持たせ、それによって出席の確認をしているようなところもあるのだが、共立ゼミではそこまでの機械化は行なわれていなかった。急成長している受験産業の旗手――予備校、と言われて誰もがあげる二つ三つの代表的企業名の中に、共立ゼミは入っていない。共立ゼミはその次くらいのクラスの予備校であった。

朝、そこへ着くと淳一は、まず自習室というところへ顔を出す。自由に利用していいその自習室の、いつも同じあたりに、同じ人間がたむろするという具合になっていたのだ。ただし逆に、自習室へは姿を見せず、教室から教室へ有名講師の授業を追ってさまようタイプの人間もいる。それで、どちらかという自習室たむろ派のほうか、バンカラ派というか、いまひとつ真剣味が足りない一派という色彩であった。

で、そこへ顔を出すと、ここでできた友人たちに会うことになる。

「おっす」

「おっはよ。偉い偉い、今日は遅刻しなかったじゃない」

というおかま言葉を使う線の細い二枚目は、だいたいどうじやうじ大道寺雄二である。言葉から判断して、軟弱なバカだろうと思ったら大違い。淳一よりずっと上のランクの大学の、理工系を目ざしている優れ者で、考え方も淳一なんかよりずっと大人っぽくて、大胆なのである。

「あつ。津吹くん今日の英文解釈の講義どうするの」

と救いを求めるような声で尋ねてくるのは吉沢安伸。よしざわやすのぶ丸っこい童顔に眼鏡という、気の弱そうな男である。絵の分野に進みたくて、私大の芸術学部を志望していた。

「出るよ。おれ、英文解釈がいまいち弱いからな」

「じゃ、ぼくも出る」

主体性のない奴なのである。

「いいじゃない、津吹くん。この頃やる気になってるのね」

大道寺がほめてくれた。

「そういうわけでもないけどさ」

「でも、夏の頃とは別人みたいよ。あの頃は津吹くん、よれよれだったもんね」

それを言われるとつらい。夏休み時期の淳一は、浪人にあるまじきことだがガールフレンドなんかを作って、デートを楽しんだりしていたのだ。その頃には、受験勉強なんかする気も失せていて、ぼやーっと無気力に時を過ごしていた。そういう事情を、大道寺には知られているのだっ

た。

「すんだことは言うなよ。今はおれだって、最低限やる気になってんだから」

大道寺は変に色っぽく、ニッコ、と笑った。

すんだことである。

もう、取り戻せないことである。

だが今でも、淳一はあのことを思うと胸がせつないのだった。夏のほんの一時期、美しくて魅力的な女の子と、心が通じあう気になった。短い、心の燃える時があった。

高藤由紀子。

その名を頭に浮かべると、まだわずかに心臓が脈動のペースを乱す。

考えないようにするしかなかった。そんなこと考える暇もないくらいに、真面目に浪人やるしかないわけだ。

と、頭ではわかっていた。だがそんなにうまくいくものでもない。

淳一は結局、ひとつ講義を受ければ次は自習室で我流の勉強をなんとなくやる、それにあきればラーメン屋やファースト・フードの店で仲間と雑談する、というような、いまひとつ気迫に欠けた生活を送っていくわけであった。そして、それでも以前にくらべればかなりやっているほうなのである。それ以前がいかにも何もやっていなかったか、ということであるが。

「立花講師の英文解釈は、歯切れがよくて聞いててあきないけど、どうも催眠術かけられてるよ